

地域のリソースを活かした日本文化体験授業¹

An experience-based Japanese culture class taking advantage of local resources

尤 銘煌²・黒沢 晶子³

YU Ming Hwang・KUROSAWA Akiko

Abstract

This paper is a practical report of Yamagata University's Japanese culture class conducted between the academic year of 2004/05 and 2007/08. The course has been developed as an experience-based culture learning program which can be taken by international students regardless of their level of proficiency in Japanese. It aims to provide students with the opportunity to understand aspects of Japanese culture such as tea ceremony, zazen, and local festivals, not as knowledge but as actual experience. The program features hands-on experience by taking advantage of local resources in a relatively inexpensive way. Volunteers and local specialists make a vital contribution to the program by providing us with invaluable help and support. Each activity is an excellent opportunity for students to meet the locals and communicate in Japanese with them. The questionnaire results show that the students are largely content with the program, appreciating it as an effective means of helping them adjust to the Japanese way of life. Finally the paper discusses challenges for the program, such as respecting students' cultural backgrounds, how to deal with the increasing number of students, the way not to overburden individuals who support us, and how to strike a balance between experience and knowledge.

キーワード：文化体験、人的・社会的リソース、交流

1. はじめに

山形大学国際センター（旧留学生センター）では、日本語研修コースが開講された2003（平成15）年度後期以来、来日して間もない留学生を対象とした「日本文化」の授業を行っ

¹ 本稿は、アンケート結果のまとめを尤が、他は主に黒沢が担当した。

² 山形大学国際センター准教授

³ 山形大学国際センター教授

ている⁴。学部留学生を主たる対象として設けられた「日本事情」「多文化交流」とは別個に、特に16年度以降、日本語の習得レベルに関わらず参加可能な、文化体験を中心とした科目としてカリキュラムを開発してきた。日本文化のさまざまな側面を知識としてではなく、実際の体験を通して知ることを目的に、地域のリソースを最大限に活かして、留学生の負担にならない程度の費用で、日本文化を体験する。このような授業を始めてから4年になった。本稿は、本プログラムのこれまでの歩みを振り返り、その特徴と問題点をまとめ、今後の発展の礎とすることを目的とする。以下、第2節で体験型である理由、第3節で授業の類型、第4節でアンケート結果、第5節でプログラムの特徴と今後の課題について述べる。

2. なぜ体験型なのか

「日本文化」の受講対象は、来日して間もない留学生で、大学院進学をめざす研究生や教員研修留学生、短期留学生などである。日本語の初心者が含まれること、学生全員に共通の媒介言語がないことから、教室の中で日本文化について講義形式の授業をするには、ことばの壁があった。また、たとえ媒介語が使えたとしても、教室の中でできることには限りがある。ことばや映像によってなら、以前に比べ、格段に情報の得やすくなった現在、たとえ日本にいらなくても、知り得ることは数多いだろう。日本に、山形にいて初めてできること、それも、ことばの壁を乗り越えてできることはないか、というところから、文化体験型の授業が始まった。

3. 授業の類型

授業の内容には、大きく分けて、四つの類型がある。一つ目は、この授業単独で行う茶道、温泉、こけし絵付け、けん玉、焼き物作り、座禅など通常の授業である。二つ目は、1年に1回、「多文化交流」クラスと合同で行く日帰りの見学旅行である。三つ目は、山形大学で地域貢献の一つとして始めた「エリアキャンパスもがみ」への参加、そして、四つ目は、かごかき駅伝、スリッパ卓球大会、ゆかた祭りなど地域のイベントに参加する活動である。第3節では、その代表的なものについて概要を述べる。

3.1. 通常の授業

表1に過去8学期間に3回以上行った通常の授業の内容を示す⁵。

⁴ 授業は、2004（平成16）年度から尤銘煌が担当している。また、2007（平成19）年度からは、短期留学生に限って単位も取得できる教養教育科目となっている。受講生及び2007（平成19）年度の概要については、「活動報告」の「日本文化」参照。

⁵ 各学期1回目の授業（オリエンテーション、日本の地理）を除く。

表1 2004-2007年度に3回以上実施した通常の授業内容（実施回数順）

	内 容	実施回数	場 所	交通手段・時間	経 費	協力者など
1	山形県郷土館 文翔館（山形及び日本の文化・歴史）	8	文翔館	自転車10分	無 料	文翔館 ボランティアガイド
2	茶道	8	清風荘宝紅庵	徒歩 10分	茶 菓 500円	茶道師範、清風荘職員
3	温泉	8	蔵王大露天風呂	車 40分	450円	大学事務職員
4	平清水焼き	8	七右衛門窯	自転車20分	900円	窯元店主
5	けん玉	6	教室	—	無 料	山形けん玉友の会 会員
6	こけし絵付け	6	教室または七日町（こけし館）	自転車10分	教 室 500円 こけし館 300円	こけし館職人
7	日本の歌（カラオケ）	6	七日町	自転車10分	500円	—
8	日本の歌（練習）	5	教室	—	無 料	—
9	座禅	5	妙泉寺 常林寺	自転車 15分、5分	無 料	住職 大学教職員
10	折り紙、カルタ、福笑いなど	5	教室	—	無 料	大学事務職員、日本人学生
11	詩吟	3	教室	—	無 料	詩吟師範
12	着付け	3	協力者宅、H19より清風荘	徒歩 10分	無 料	おひな様研究家、着付け師範、非常勤教員

実施回数が2回以下のもの：お花見、相撲、年中行事などのビデオ（各2）、雛人形・福笠展示会を見学、囲碁、蕎麦打ち、武道（剣道・居合道・柔道・合気道）、スケート、パチンコ、銭湯、上山城・足湯、和菓子作り（各1）

それぞれの内容に関しては、実際に出かける前に、日本語、英語、中国語、韓国語で書かれた資料を渡し、予備知識を持って体験できるようにするほか、現場でも、協力者の説明を、教員がわかりやすい日本語、英語、中国語で説明するなど、言葉のケアをしている。また、日本語力の高い学生が増加した現在では、その学生たちがしばしば自分の母語に通訳する役割を務めるようになった。

以下に表1の各項目の概要を記す。（ ）内は、その項目の主な目的である。

(1) 山形県郷土館・文翔館（山形・日本の歴史を知る）

いつも学期の初めに出かけるのが、山形県の旧県庁舎及び県会議事堂だった重要文化財の文翔館（山形県郷土館）である。復元された建物の中に、山形の近代史に関する展示があり、ボランティア・ガイドから山形の歴史・文化などについて説明を受ける。ここへは、大学から自転車で10分で行くことができ、入場無料である。

(2) 茶道・清風荘宝紅庵（日本の伝統文化に触れる）

大学から徒歩や自転車で行けるところに清風荘という市の施設があり、宝紅庵というお

茶室も併設されている。留学生は、まず椅子席に案内され、立礼のお手前でお菓子とお茶をいただく。茶道の師範からお手前の手ほどきを受けたあと、宝紅庵に移動し、お茶室について詳しい説明を聞き、実際ににじり口からはいってみたりする。清風荘は、手入れの行き届いた池泉回遊式の庭園の中にあり、日本の庭の一つの類型を見ることができる。

(3) 温泉・蔵王大露天風呂（日本の温泉文化を味わう）

温泉を楽しむことも日本文化の一つと言えよう。山形は44の全市町村に温泉のある温泉王国であり、大学のキャンパスからもその山容が眺められる蔵王に大露天風呂がある。新緑や紅葉の下で清流と交わる温泉の湯に入る体験はすばらしく、ここで温泉に開眼し、病みつきになる留学生も少なくない。後述するアンケート調査の結果からもわかるように、多くの学生が興味を持った項目のひとつとなっている。また、入浴のマナー・文化などを学生に知らせる機会でもある。問題点は、蔵王に行くには、車が必要なことである。大学の公用車を運転して行くが、参加者数によって国際センターの事務職員にも運転を依頼している。その負担が一つの欠点である。文化上の問題については、5.4.で述べる。

(4) 平清水焼き・七右衛門窯（山形の伝統工芸を体験する）

約200年の歴史を持つという平清水焼きは、山形の伝統工芸の一つであり、大学から自転車で20分、山形市の平清水というところに窯元が集まっている。その一つ、七右衛門窯の陶芸教室で各自が自分の作品を作る。作業場の見学もできるし、制作後、漬け物をお茶請けにお茶をいただきながら窯元の主人や職人と交流ができるのもよい点である。

(5) けん玉（日本独自の発展を遂げた遊びを通して地域の人々と交流を深める）

山形県長井市は、競技用けん玉の有数の生産地として知られている。けん玉は、欧州でも行われる遊びだが、日本で独自の発展を遂げている。授業では、山形けん玉友の会の会員（日本けん玉協会指導員）がけん玉の歴史、文化を紹介し、様々な技を披露する。そのあと、基本から応用までの技を教え、最後にけん玉会長が学生の技能によって、級別の認定書を手渡している。

(6) こけし絵付け（山形こけしの歴史を知る）

こけしは、山形県をはじめとする東北地方の名産品である。こけしが土産物として作られるようになったのは、温泉が湯治場として発達した江戸中期以降である。山形市には、こうした歴史を知ることのできる伝統こけし館があり、現在は、こけし館の職人が大学の教室で山形こけしを紹介し、絵付けの指導をしている。ただ見て話を聞くだけでなく、自分で描いてみると、山形系のこけしの模様や髪形の形などにも注意が行き、よく理解できると思われる。

(7)(8) 日本の歌・カラオケ（日本人との付き合いに使える）

定番となった授業の中には、カラオケもある。同じ日本語の歌を覚えるなら、童謡や唱歌ではなく、カラオケで歌えるような歌がいいという理由で取り上げてきた。それは、一度覚えたら、一生日本人との付き合いに使えるからである。2回続きのうち、初めの授業では、まず、いくつか選んでおいた歌の歌詞の意味を解説し、ビデオで練習する。学生は、自分の歌を決めて練習し、翌週、カラオケ・ボックスで歌う。注意すべき点は、学生の日本語力に応じた歌詞でなければ理解しづらく、覚えにくいことである。東アジアの国々で

は、カラオケが日本同様一般的なので、カラオケ自体に新鮮みはないが、歌を通じて日本語を学習し、日本人と付き合うというところに意味がある。半面、最近の傾向として、国を問わず、短期留学生にとって、もはやカラオケも日本の歌も新しいものではなくなってきたことが挙げられる。研修コース開設当時のような意義は薄れてきており、再考の余地があると言えよう。

(9) 座禅・常林寺（日本の精神文化に触れる）

大学の近辺には寺社が多く、禅寺では座禅ができる。早朝に集合する大変さはあっても、後述のように、アンケートで「興味を持った内容」に挙げる者が少なくない。初めに、住職にお話を聞き、それを教員が英語と中国語で簡単に伝える。そのあとは、壁に向かって約1時間座り続ける。この活動のよい点は、禅寺で観光的でない座禅が組めることだけでなく、座禅のあとで住職や一般参加者との交流ができることである。一方、問題点は、集合が朝5時20分と早いため、起きられず遅刻する学生がいること、足を組むのがかなり難しく、教員も含め、ほとんどの学生が本式に組めないことである。宗教的な問題については、5.4.で述べる。

(10) 日本の遊び・折紙、カルタ、福笑い、トランプ、オセロ

（日本人とともに遊べるように）

山形では冬の間は雪が降り、自転車にも乗りづらいため、外に出にくくなる。そのような期間に行いやすいものとして、教室でできるこうした遊びがある。折り紙、いろはカルタ、福笑いのほかに、伝統的な日本文化ではないトランプとオセロも含まれるが、これもカラオケ同様、普段、日本人といっしょに遊べるように、という考えから行っているものである。

(11) 詩吟（詩歌の心を表現する）

日本の小中学生用に開発された教本『若あゆ』の中から、「偶成」（少年老い易く学成り難し…）等を選んで、詩吟師範から意味、詩吟の効果、腹式呼吸などについての説明のあと、吟詠の指導を受ける。また、師範のモデル吟詠も行われる。

(12) 着付け（日本の伝統的な衣文化を知る）

着物の着付けは、短期留学生（女子）から希望があったのをきっかけに2005（平成17）年度に始めた。1回目は、着付けをお願いした方の自宅で、個人の着物を女子学生3名が着せていただいた。この方式は、個人への負担が大きすぎるため、1年余り見合わせていたが、国際センターでリサイクルの着物3着（振り袖1、付下げ1、大島紬袷対・袴各1）、帯、ゆかた5着に襦袢、小物類、桐箱などを購入し、場所も市の施設である清風荘（茶道で利用）の和室を借りて、2007（平成19）年度から再開した。着付け師範、非常勤教員など複数の協力者を得、着物も数着、貸していただいております、学生にとって、またとない機会となっている。問題点に関しては、5.4.で取り上げる。

(13) 現在は行っていないもの

(1)～(12)のように繰り返し行うようになったもの以外に、1、2回はしてみたが、その後、中断してしまったものも少なくない。お花見、(2回)、囲碁、蕎麦打ち、武道（剣道・居合道・柔道・合気道）、スケート、パチンコ、銭湯（各1回）などである。たとえ内容とし

て望ましくても、下記のように、実施しにくい様々な理由があるためである。

お花見は、山形市の気候では、桜の咲く4月中旬から下旬にかけて、夜はまだ寒いというのがその主な理由である。囲碁は、市内の高齢者交流サロンで碁を打っているお年寄りに碁を教えてもらい、交流する。その意図はよいが、実際には、ルールが難しくて、結局、五目並べでお茶を濁してしまう、といったことになる。また、蕎麦打ちは、蕎麦打ち職人との交流も含め、大変よい体験なのだが、問題は、そこへ行くのに車が必要だということである。

武道、スケート、パチンコ、銭湯なども、1回だけであとは続いていない。理由は様々であるが、武道は、体育学の教員や武道サークルの学生たちなど、複数の協力者との時間調整が大変なこと、スケートやパチンコは、文化や交流という点から見ると物足りないこと、銭湯は温泉と重なるなどといったことが主な理由である。

3.2. 日帰り見学旅行・「多文化交流」との合同授業

（地域の民俗文化を通して日本人の死生観を知る）

日本語上級者と日本人学生が共に学ぶ「多文化交流Ⅲ」では、毎年度、「日本人の死生観」をテーマにした授業を行っている。普段は教室での授業だが、後期の一日、土曜日か日曜日を利用して見学に出かける。この日帰り旅行に「日本文化」の学生も合同授業という形で参加している。

初めに天童市の「若松観音」へ行き、ここで「ムカサリ絵馬」を見学する。「ムカサリ絵馬」とは、若くして未婚で死んだ娘や息子を哀れに思った親が、空想上の結婚式の絵を親族や専門の絵師に描いてもらい、それをお寺に奉納するもので、山形の内陸地方にしか見られない追善供養の形の一つである。昼食のあと、寒河江市のオクヤマ葬祭会館を見学し、職員から日本の葬送儀礼について詳しい説明を受ける⁶。最後に中山町歴史民俗資料館へ行き、重要文化財になっている口寄せ巫女習俗資料を見ながら、学芸員による説明を聞く。資料館では、過去の生活用品、農作業機具などの展示もあり、アジアに共通の機具や囲炉裏を切った部屋なども学生の興味を引くようである。この日は、以上のように地域の民俗文化を通して、日本人の死生観を知る一日となる。また、昼食休憩をとるゆらら温泉には足湯もあり、「多文化交流Ⅲ」の授業に参加している日本人学生と留学生に交流の場を提供している。

3.3. 山形大学エリアキャンパスもがみ（地域交流と地域貢献）

次に、山形大学エリアキャンパスもがみである。山形大学の教員・学生と山形県最上地方の住民が交流することによって地域の活性化を図る構想のもと、様々なプロジェクトがスタートしたが、2005（平成17）年度前期には、学生が企画する「やってきました大学祭」の中で、留学生料理教室に参加した。また、同年度後期の「大蔵村自然塾」という企画では、留学生が講師として出かけ、日本語で自分の国の紹介をしたり、小中学生からの質問

⁶ 見学には、予め友引の日を充てている。

に答えたりした。そのあと、地元のお年寄りからお正月用の注連縄飾り作りを教えてもらい、小中学生といっしょに縄をなった。この二つのイベントに、他の留学生といっしょに、「日本文化」の学生も参加した。講師として呼ばれた先では、子どもたちやお年寄りと交流するだけでなく、おそばをごちそうになったりする楽しみもある。「日本文化」という授業の視点から見ると、注連縄作りは文化体験であるが、全体としては、地域交流、地域貢献に重点のある項目である。

3. 4. 地域イベント参加（地域交流）

「日本文化」授業の四つめのカテゴリーとして、山形各地で行われる地域のイベントへの参加がある。地域イベントには、通常「日本文化」の学生だけでなく「多文化交流」クラスやその他の留学生もともに参加している。地域イベントの中にも、継続して参加しているもの、そうでないものがあるが、下の(1)～(2)は、2005年度から毎年、(3)は2004年度及び2007年度に参加している行事である。

(1) かみのやま かごかき駅伝（5月）

5月の連休には、山形市から電車で13分の上山で、かごかき駅伝競走大会が開かれる。それぞれ違う国籍の学生がチームを組み、かごや衣装のデザインを考えて作る。かごを作るには、大学のシルバー・ボランティアの助けが欠かせないが、その後学生たちがシルバー・ボランティアの自宅に花火見物に招かれるといった交流に発展することもある。これは、お茶やこけし絵付けのような伝統文化とは異なるが、このイベントに参加することのメリットのひとつは、地元のメディアにとりあげられることで、山形大学の留学生の一つの広報活動になることである。また、シルバー・ボランティアの方や仲間といっしょに活動して、最後に打ち上げをするという交流の楽しみもある。ただ、準備に時間がかかること、「日本文化」の学生全員が駅伝に参加することはできないのが欠点である。普通の授業の枠をかなりはみ出したものであるが、交流であり、体験型であるという点が、ほかの授業との共通点である。

(2) 河北町 スリッパ卓球大会（6月）

山形県河北町は、スリッパの生産高日本一を誇っており、そこで考案された町おこしのイベントが、このスリッパ卓球大会である。少し大きめのスリッパの底を使って、ラージボールを打つ。スリッパ卓球大会は、1997年に始まり、2004年から「世界大会」と銘打っていたものの、参加者は日本人だけだった。2005（平成17）年度から山形大学の留学生が参加するようになり、名実共に「世界」大会になった。2006（平成18）年度から「多文化交流Ⅰ」クラスの日本人学生・留学生も参加しており、これまでに、留学生が準優勝したこともある。このイベントは、ちょうどサクランボの季節に行われるので、参加者にはサクランボがふるまわれる。休日1日ばかりだが、地域のイベントに参加することで地域とのつながりが持て、また、かみのやまかごかき駅伝同様、地元のテレビや新聞で紹介することで、山形大学の留学生の存在をアピールする効果がある。

(3) かみのやま ゆかた祭り（7月）

7月には、上山でゆかた祭りが行われる。時間・天候が許せば上山城を見学してから足

湯に入り、夕方、ゆかたコンテストに出場する。ゆかた・帯は、着付けのために購入したもの、教職員・学生の手持ちのもの、祭りで貸し出されるものなどを利用し、地域のボランティアによって着付けがなされる。そのボランティアやゆかたコンテストに出る親子など地元の人との交流もできる。2004年には外国人の部で山形大学の留学生が優勝した。帰りが夜になることもあって、その後続けていなかったが、着付けクラスのため、補助的にゆかたを購入したことがきっかけで、2007年に再び参加するようになった。後述するアンケート結果からは、学生にとって印象深い行事となっていることが窺われる。

(1)～(3)に対して、(4)の各行事のように、さまざまな理由から、一度だけの参加にとどまっているものもある。

(4) 現在は参加していない地域イベント

天童・人間将棋（4月）、朝日村・国際バンジージャンプ・フェスティバル（7月）、花咲かフェア寒河江（7月）、山形市・寄席（1月）及び民謡大会（1月・3月）には、それぞれ1度ずつ参加している。

山形駅から電車で20分ほどで行ける天童は、将棋の駒の生産地で、人間を駒に見立てた人間将棋が一つの行事になっている。ちょうど桜も咲き始め、お花見も兼ねることができ。留学生たちが鎧甲をまとい武者姿の駒になるのは絵になるが、デメリットもある。それは、将棋の駒になるといっても、自分の考えではなく、棋士の指示で動くだけであること、また、将棋のルールは付け焼き刃では覚えられないため、ゲームの動きを楽しむことも難しいということである。

月山の近くに位置する朝日村は、吊り橋から34m下の梵字川めがけて飛び降りるバンジー・ジャンプで知られている。バンジー・ジャンプは、南太平洋の島（バツアヌ共和国）で行われていた成人式の行事がもとになっていると言われ、朝日村では、成人式を8月に、このバンジー・ジャンプで行っている。7月の国際バンジー・ジャンプ・フェスティバルでは、ジャンプの技術だけでなく、表現や演出も評価される。2005年度に参加した際、留学生は、インドの修行者の姿で手を合わせたまま飛ぶ者、自分の体に「南北統一」の文字をかく者など、それぞれ工夫して演出し、何人かが入賞した。日本文化とは言えないが、学生たちにとっては、月山の山村へ行く機会にもなり、庄内地方の人々や他の参加者との交流もでき、よい体験になった。一方、デメリットとしては、県内とはいえ、片道2時間近くかかること、そして、参加費こそ無料だが、公共交通機関で行きづらい場所のため、ミニバスなどの費用がかかることがある。また、バンジー・ジャンプは安全なスポーツだということであるが、危険が全くないわけではない。私たちが参加した翌月、バンジー・ジャンプの職員一人が増水による事故で亡くなった。それ以来、朝日村のバンジー・ジャンプは再開の目途が立っていない。そうした事情のため、一度参加するにとどまっている。

また、同じ7月に寒河江市で花咲かフェアというお祭りがある。2004年には大学の事務職員を通して留学生に法被が貸し出され、神輿をかつぐ体験ができた。デメリットは、会場まで行くのに、最寄り駅から車が必要なことである。このときは、職員が迎えに来てくれたが、毎年続けると、負担をかけることになってしまう点が問題である。

そのほか、地域イベントとしては、山形市で開かれる寄席や民謡大会があるが、落語や

講談は、言葉や文化的背景が十分に分からないと面白さが味わえない点、民謡は、三味線音楽に触れる機会であり、音楽好きの学生は興味を持つが、歌詞が分かりにくい点、また、いずれも学生自身が参加できない点が他のイベントと違うところである。このように、通常の授業と同様、地域の行事も、内容の理解しやすさや経費面・交通手段・協力者への負担などに関わる実現しやすさが継続の重要な条件となっている。

4. アンケート調査結果と今後の課題

第4節では、アンケート結果をもとに、受講者の目から見た本プログラムの意義と課題を考えてみたい。(資料参照)

4. 1. アンケート調査概要

2007(平成18)年3月、連絡可能な、それまでの受講者に「日本文化」についてのアンケートを実施し、2008(平成19)年2月、同年度の受講者に同内容のアンケートを行った。アンケートは日本語・英語で作成し、回答は日本語・英語・中国語のいずれでもよいとした。合わせて33名から回答があった。出身国・地域の内訳は、①中国8名、②中国以外のアジア諸国18名、③アジア以外7名となっている。受講者の年齢は、20代24名、30代9名である。以下、「授業への満足とその理由」「特に興味を持った内容とその理由」「受講したもの以外に希望する内容」「授業への感想・コメント」「日本文化体験授業をもっとよくするためには」の各項目の結果を概観し、今後の課題について考察する。なお、文中、中国語による回答は日本語に訳してある。

4. 2. 満足度

①とても満足：21人 ②満足した：12人 ③不満：0人 ④とても不満：0人

全員が「とても満足」「満足」のいずれかを選んでいる。その理由として挙げられているのは、「現場で／実際に体験できた／the first-hand experience with Japanese culture」「普段／この授業以外では／1人では体験できない内容だった／the only opportunity for foreign students to explore the Japanese culture」のように、他では得られない直接の体験だったこと、「日本の伝統文化に触れる機会だった」「日本について知らなかった部分も知ることができた」「日本に対して前より理解できた」「… through this class, I learn to appreciate Japanese way of life and respect their culture. Hence, it guides me in how to deal with life here in Japan」など、日本をよりよく理解し、日本の生活になじむ機会になったこと、そして、「ほかの国の留学生といっしょに参加し、日本だけでなく、いろいろな国の話ができる」「友だちができた」のように、交流が楽しかったことである。全体として、受講者が本プログラムを好意的に評価していることがわかる。

4. 3. 特に興味を持った内容

「特に興味を持った内容」(複数回答可)の上位7位を表2に示す。

総数では、茶道、温泉、こけし絵付けの順になるが、実施回数との比率で見ると、かみ

表2 最も興味を持った内容

	内容	人	回数
1	茶道	27	8
2	蔵王大露天風呂体験	23	8
3	こけし絵付け	19	6
4	座禅	17	5
5	文翔館	15	8
6	かみのやまゆかた祭り	14	2
7	日本の歌（カラオケ）	13	6

のやまゆかた祭りを挙げた者が圧倒的に多く、次いで座禅、茶道の順となっている。ゆかた祭りでは、全員ゆかたを着てコンテストに参加したこと、会場からライトアップされた上山城までゆかた姿の人で埋め尽くされ、祭り独特の雰囲気が味わえたばかりでなく、自分たちもその一部になれたことなどによって、より強く印象に残る経験となったものと推測される。

上記の項目を選んだ理由としては、各々、次のようなものが挙げられている。

「茶道は日本の昔の礼儀というか、それについて知ってよかったと思う」（韓国）、「Onsen and sento customs are unique to Japan yet it is embarrassing to be naked in public.」（フィリピン）、「こけし絵付けの授業で描いたこけしは、今まで実家に飾っており、日本でのいい思い出になった」（中国）、「こけし絵付け、自分からかいて作ったから面白かった」（韓国）、「文翔館見学を通して日本の歴史が理解できる」（中国）、「数曲のカラオケを勉強したおかげで友人や同僚などの前で日本語の歌が歌える」（中国）。

また、複数の項目に共通する理由として、「All of these are experiences that are inherently Japanese in nature but that I would not be experiencing if I didn't attend this class.」（フィンランド）、「It was my first time to encounter (experience) those things and I really admire how the Japanese keep their culture intact through this time」（フィリピン）、「以上選んだ活動は中国になくて参加できません。それにその活動は日本の特色があって興味があります」（中国）、「普段一人ではやりたくてもできなかった体験をするのが楽しかった」（韓国）などがある。日本で時を超えて育まれてきた固有のものであること、ほかではできない直接の体験だったことが5.2.の満足度とも重なる主な理由となっていることがわかる。

4.4. 受講したもの以外に希望する内容

受講したもの以外に希望する内容としては、①武道（剣道、弓道）（台湾、ラトビア）、生け花（ラトビア）、日本画（フィリピン）、書道（フィリピン）、刀の作り方見学（米国）、歌舞伎観賞（中国）など、伝統的な技芸に関するもの、②日本料理（台湾）、精進料理（韓国）、そば打ち（韓国）、流しそうめん（フィリピン）、テーブルマナー（シエラレオネ）など食文化関連、③お正月の過ごし方（バングラデシュ）、伝統行事（台湾）、日本の祭り（台湾）、ほかの地域のイベント（中国）などの行事、④京都・奈良などを見学（インド）、a visit to famous places of Japan, like Hiroshima（バングラデシュ）などの旅行、⑤国会議員・県・市議員・市町村長訪問（中国）、企業見学・科学技術展示会見学（中国）、日本の農家生活（マレーシア）など、現代日本の政治・経済・科学技術・生活に関するもの、⑥日本の歴史（バングラデシュ）、教育哲学（シエラレオネ）、日本人とのつきあい方（シエラレオネ）、the way Japanese think and the way they react（ベナン）など、知識面で日本と日本人を深く知ろうとするものなどがあつた。遠隔地への旅行など本プログラムの

守備範囲を超えるものや武道、そば打ちのように実現しやすさに関わる理由で継続していないものもあるが、いくつかのものは、今後検討する余地があると思われる。

4. 5. 授業の感想

授業への自由な感想を求める質問には、4. 3.、4. 4.と同様、文化体験が新鮮で面白かったこと、自分で実際に体験できるのがよかったこと、個人の力で体験できないことを授業で体験したことを挙げる回答が複数あった。しかし、それだけではなく、日本語運用の場であり、異文化理解の機会となったこと、教員の取り組みや知識優先でないことへの評価なども述べられている。以下に主なコメントを挙げる。

- ①日本語を運用する機会になったこと：「日本文化に関する知識を得るだけではなく日本語の勉強にも大変役に立った」（中国）、「話し合いによって日本語の練習にもなる」（中国）
- ②担当教員の自然体での取り組み方を評価するもの：‘Excellent, especially the communication skill of Yu Sensei’（バングラデシュ）, ‘… gratitude goes to Professor Yu Ming-Huang, who makes the course really enjoyable’（バングラデシュ）, 「先生はカリキュラムをよくアレンジした」（中国）
- ③教室の外に出たことを評価するもの：「本や普通の授業などでは、体験できなかった分野についても学べることで良かったです」（韓国）, ‘Here in this class, we really come to the place and not just discuss it inside the room’（フィリピン）
- ④異文化理解、異文化適応のきっかけになったとするもの：「教科書では分からない、なかなか感じられない、日本文化を体験することで日本の文化を分かち合うことができ、日本生活になれるよう役に立ちました。」（韓国）, ‘I think that I'm happy to have taken Japanese culture class because that is helping me to get slowly integrated in Japanese society’（ベナン）, ‘It is an effective means of helping foreigner students adjust to the culture shock which they face or experience in Japan’（シエラレオネ）, ‘Japanese culture class brings the foreigner students to know much more about the Japanese traditional lives and brings down the gap between the multicultural’（インド）

4. 6. もっとよくするためには

「日本文化体験授業をもっと良くするためには」どうしたらよいか意見を求める質問には、①「田舎の方へ行って地元の人と接する機会を与えること」（ラトビア）や ‘home business or homestay can touch with Japanese family style’（ミャンマー）のような具体的な案（4. 4.に類するもの）、②「週末か祭日に集中的講義があれば、山形市外もっと遠いところへ行ける」（中国）, ‘If possible more fieldtrip could be added’（バングラデシュ）, ‘it would be nice someday to go somewhere further, outside Yamagata, though it ought be expensive’（ラトビア）など遠出を望む声、③「日本の学生といっしょに体験するようになったらいいと思います」（韓国）, ‘How about experiencing Japanese culture together with Japanese students, somehow it is interesting to hear how young Japanese people appreciate their

own culture. We used to go to different places on ourselves (all foreign students), and the people explaining to us are all elderly Japanese people' (フィリピン) のように、日本の学生とともに活動することを望む声、④「体験だけではなくその体験に対する背景や知識をもっと知ることができれば、理解が深まることができます」といいます」(韓国)、「It will be better if the foreign students are provided with a good text-book of Japanese culture' (バングラデシュ) のように、しっかりした背景知識や教材を求める要望などがあった。

①の日本人宅訪問は、交流行事の一環として、また、「多文化交流」のグループ活動としても行われている。また、②に相当するものには、大学全体の留学生を対象とした実地見学旅行や人文学部留学生のための近県への旅行がある。さらに、③の日本人学生との協働は、「多文化交流」で行われており、一定の日本語力があれば短期留学生や研究生にも参加できる。しかし、④こそは、他で補うことのできない、本プログラムにとって最大の課題の一つと言える。資料の配布や現場での説明だけでは足りない、体験の裏打ちとなるようなまとまった知識を求める学生がいるということである。文化体験が楽しければ楽しいほど、もっと深く知りたいという気持ちが芽生えるのは自然だとも思われる。

一般の講義と異なり、文化体験は時間内にすべてを終わらせるのは難しいことが多い。移動の時間を別として、残った2時間ほどは講師の挨拶、学生の自己紹介、準備、手順などの説明、活動、写真撮影、後片付けなどで手いっぱいになりやすい。中心となる活動や作業を進めることに追われ、じっくり、その活動の意味や背景まで考えている余裕がないのである。しかし、それでは、ただ楽しかったという体験だけに終わってしまいかねない。今後は、言語の問題を克服しながら、教員と専門家による講義の時間を適宜設け、独自の教材を開発していくことが課題であると考えている⁷。

5. 特徴と問題点及び今後の課題

第5節では、まず本プログラムの特徴をまとめ、「実現しやすさ」と「効果」という観点から考察し、最後に問題点と今後の課題について述べたい。

5.1. 本プログラムの特徴

「日本文化」の授業の特徴を整理してみると、第一に、知識優先でないこと、主として教室を出て実際に自分で何らかの活動を行う体験型だということが挙げられる。第二に、体験中心であることによって、日本語が十分でなくても、また媒介語にそれほど頼らなくても済む。第三に、山形の豊かなリソースを活かしている。この授業に欠かせないのが人的リソース、すなわち協力者の存在である。地域のボランティア、お寺の住職など、様々な方に支えられて、この授業が成り立っている。そして、社会的リソースとして、大学から徒歩や自転車で行ける距離にある山形県郷土館（文翔館）、茶室・庭園（清風荘宝紅庵）、

⁷ 松下他（2005：105）では、講義と体験学習の組み合わせである「金沢学」のアンケート調査で、少数ながら講義を聞くことが不満の理由として挙げられているという。学生の日本語力に配慮し、事前学習の工夫を考える必要が述べられている。

窯元（七右衛門窯）、寺（常林寺）などは、ヴァーチャルな仮想空間ではなく、実際にそこに身を置くことによって、五感を働かせて、歴史やそこで培われてきた伝統的なものの見方を感じ取ることでできる場所を提供している。第四に、当初、特別な授業補助のない形で始まったこともあり、できるだけ学生に経済的な負担のかからないようにする必要があったため、少額の費用で実施可能なものを選んできた。その結果は、必ずしも経費をかけなくても、さまざまな工夫により、このような文化体験が実現できるということを示している。一方で、そのために協力者に負担をかけることがあったことも否めない。一定の補助がこうした問題の解決に役立つと考えられる。第五に、このような必要から始まった授業が自然に地域交流になり、場合によっては、留学生の地域に対する貢献にもなる、ということも大きな特徴の一つと言えるだろう。以上の特徴を図1に示す。

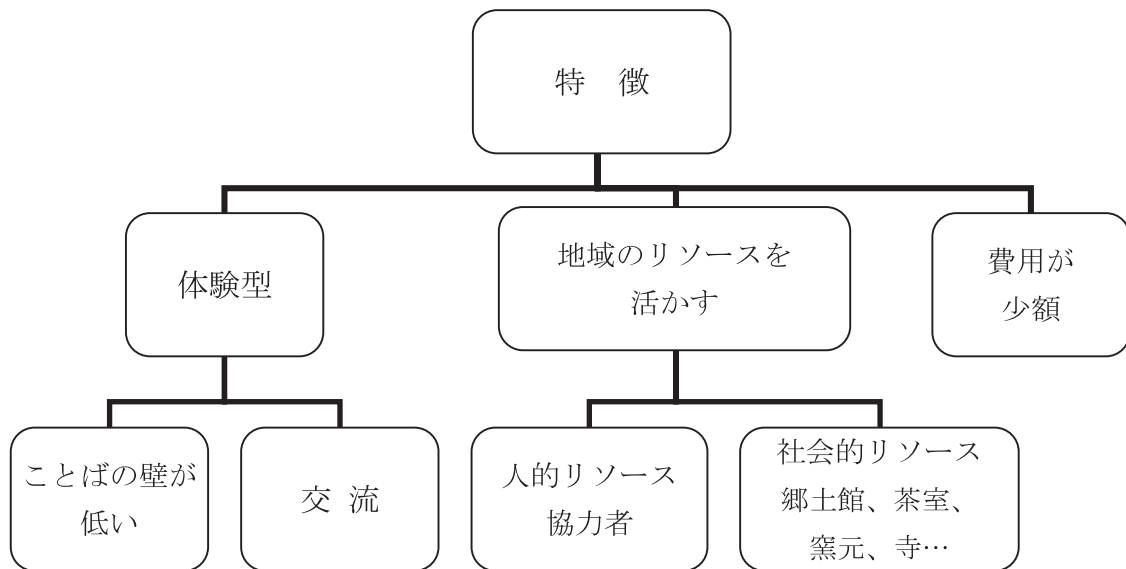


図1 日本文化体験授業の特徴

5.2. 実現しやすさと継続可能性

日本文化体験授業では、3回に2回は外へ出る。外へ出るためには、そして、それが継続できるものであるためには、実現しやすいものでなくてはならない。実現しやすくするためには、場所・交通手段、移動・活動時間、経費、協力者などを考慮することが必要である。

第一に、場所は、公共交通機関の発達した大都市圏のような便利さは望めないため、なるべく、大学の近くで、自転車か徒歩で行けることが望ましい。次善は、電車やバスだけで行けるところである。第二に、この授業は、毎週二コマ（180分）とってあるが、移動も含め、その時間内にできることが望ましい⁸。特別なイベントは別であるが、それでも、

⁸ 岡山大学における文化体験型の日本事情では、移動を除いた見学・体験そのものに、ほぼ2コマ相当の時間が当てられている。（岡2005）

半日ばかり、一日がかりのものは、頻繁にはできない。第三に、経費面で、学生の負担があまり大きくないものでないと、参加が難しくなる。第四に、本プログラムは、協力者なしにはできないものがほとんどである。協力者に負担がかかるようだと、長続きはしない。第三・第四の問題については、専門家による講義を取り入れることとも関連するが、経費面での措置も必要である。

5.3. 授業の生む効果

「日本文化」という名前の授業ではあるが、学生たちは、伝統文化からかなり新しい地域のイベントまで、色々な体験をする。この一連の体験授業には、様々な効果がある。まず、学生は、文化を知識としてではなく、何らかの形で体験し、それが**異文化理解**のきっかけにもなっている。そして、外に出て行くことから、多文化を背景とする学生同士が、また学生が地域の人々と**交流**する機会にもなっている。その際、コミュニケーションには日本語を使うので、教室で習った日本語を実際に**運用**するチャンスにもなる。また、地域イベントに参加すると、地元のニュースに取り上げられ、山形大学の留学生の**広報**活動になるという効果もある。そして、時には、留学生が講師になったり、料理を教えたりすることで、小さいながらも**地域貢献**に携わっている。このように、この体験授業には、教室から出たことによって、教室で学んでいるだけでは得ることのできない、様々な副次的な効果が生まれているといえることができる。「効果」の各要素を図2に示す。

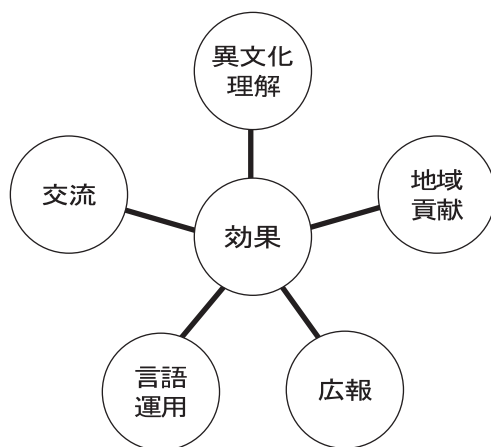


図2：文化体験授業のもたらす効果

5.4. 問題点と課題

本プログラムには、その効果と同時にいくつかの問題点もある。本節では、問題点とプログラムの抱える課題について考えてみたい。

(1) 参加者の文化的背景への配慮

本プログラムで注意すべき点としては、学生は様々な文化的背景を持っており、実施に当たって、それが障壁にならないよう、また問題がある場合は、強制にならないよう、配慮しなければならないということがある。温泉は、人前で裸になる習慣のない国から来た

学生にとっては、心理的抵抗もある。イスラム教徒のように宗教上の制約がある場合もあり、強制はしていない。日本の歌（カラオケ）や詩吟は、一見問題がなさそうだが、ある国のイスラム教徒の女性は歌うことは禁じられていると言ひ、聞くだけの参加になった⁹。座禅は、呼吸法・健康法としての側面も持つが、本来宗教的なものであり、読経を聞いたり儀式として仏像を拝んだりすることは、他教の宗教心の厚い者にとっては問題になろう。

⁹ 厳格なイスラム法の考え方では、感情に働きかける娯楽のための音楽や信徒の本分を忘れさせる歌は禁止行為であるとされる。

しかし、文化上の壁があるからといって、初めから採り入れないというのではなく、その積極的な意義を認め、経験の機会は提供するという方針で行っている。いずれも問題のある場合には代替的な参加方法（見学など）を考えている。

(2) 参加者数増加への対処

「日本文化」への参加者は、開始当初の数名から2007（平成19）年度前・後期の10名へと、年を追って増えており、人数が増えたことによる問題も生まれつつある。自転車や公共交通機関が利用しづらい場所への移動手段は公用車であるが、2台以上運転するには、担当教員以外に事務職員などの応援が必要で、それが業務への過重な負担となることを避けなければならない。また、時間のかかる内容の実施方法にも見直しが必要となってきた。例えば、着付けは、ひとりひとりに着物を着せるにはかなり時間がかかるため、参加者が増えた2007（平成19）年度には、着物の伝統、種類や約束事などについて十分に説明を受ける時間がなくなっている。少人数がモデルとなり、残りの学生は見学するという方法もあるが、見学と実際に着てみるものの間には質的な違いがある。現在は、抽選で着物とゆかたを着る学生に分け、全員和服を着ることができるようになっているが、それと背景知識を得ることを両立させるため、来年度以降、授業を2回にし、1回目に着物について話を聞く時間を設けることを計画している。

(3) 協力者への負担と経費面での対策

今後とも協力者個人への負担が大きすぎないプログラムにしていくよう努めていかなければならないが、同時に、公共交通機関で行きにくい場所へ出かけることや複数の専門家による支援などの可能性を広げるために、一定の授業補助が大きな役割を果たすと思われる。

(4) 体験と知識とのバランス

4.6.で述べたように、文化体験には、体験でしか得られない価値があると同時に、知識の裏付けなしには、単なる楽しい経験で終わってしまう危険性がある。教室を出ることから始まったプログラムであるが、そのよい面は維持しつつ、知識とのバランスをとるようにしていくことが本プログラムの今後の大きな課題と言える。

日本文化体験授業は手探りの状態から始めて4年になる。年度ごとに、学生の評価や希望を踏まえて内容を見直し、新しい協力者との関係作りや新規の方法を取り入れるなど、常に改善を重ねてきた。今後も地域のさまざまな人々と関わりながら、我々にできる最善の形で留学生が日本文化を体験できるよう、日本文化体験授業の発展に向けて努力を続けていきたい。

謝辞

日本文化体験授業を支えてくださっている地域の方々、教職員の皆様に深くお礼申し上げます。

参考文献

岡益巳（2005）「文化体験・交流型の日本事情教育－実践報告－」『岡山大学留学生センター紀

要』第12号：75-90.

金沢大学留学生センター（2006）『平成17年度金沢大学社会貢献推進事業 文化体験学習プログラム「金沢学（Kanazawa Studies）」報告書』

松下美知子・岡沢孝雄・苗田敏美（2005）「金沢学の計画と実践」『金沢大学留学生センター紀要』第8号：97-108.

資料

「日本文化」アンケート（日本語の質問項目のみ）

1. 出身国：
2. 年齢：
3. 日本文化授業の内容全体は、どうでしたか。
①とても満足 ②満足した ③不満 ④とても不満
その理由：
4. 特に興味を持った内容は何ですか。いくつ選んでもかまいません。（項目省略）
また、その理由は何ですか。
5. 日本文化体験授業で受けたい上記以外の内容は何ですか。
6. 日本文化体験授業の感想
7. 日本文化体験授業をもっと良くするためには